

言葉のゆとり

千葉市女性センター名誉館長 アナウンサー（元NHK理事待遇） かがみ さちこ
加賀美 幸子

言葉の摩訶不思議さについては限りなく枚挙にいとまがない。全ての言葉がそうであるように、たとえば「ゆとり」という言葉ひとつをとっても、人によって何という捉え方の違いであろうか。

風通しの良いすかすかの空間を描く人、ぎっしり豊かに物が溢れる空間を手にしてこそゆとりという人。なすことの詰まった時間を生きることがゆとりと実感する人、いや何事にも追われずゆうゆうたる時間の中で過ごすことがゆとりという人。ゆとりの捉え方は言わずもがな千差万別である。

その中で、多くの誤解も生まれ、ドラマも生じ…それが人間の面白さでもあり哀しさでもあるのだが…言葉ひとつで、思いのすれ違いが起き、どうすることも出来ない結果になることさえあるのが人の道ともいえる。言葉のゆとりについては…どうであろうか。日本語は難しいので、子供たちも外国の人もついて行けないから、と妙に削った時期があり、私は不思議でならなかった。言葉を削ることにどんな意味があるのでしょうか。言葉はいくらあっても邪魔になることはないはず。沢山持っていて、その蔵の中から、ふさわしい表現を選んで使えば、何より魅力的であり、人にも十分心が伝わり、相手を動かすことも出来るほど強い力を持つことが出来るのに、何と勿体ない…と思い続けてきた。

持っていて、使いたくなかったら使わなければよい、必要な時に引き出せばよいではないか…言葉はいくらあっても邪魔になど決してならないものである。それこそゆとりではないであろうか。豊かな日本の言葉たち…言葉こそ文化の証であり、文化そのものと言っても過言ではない

のに、削るなんて…そんな大それたことはしたくないものである。

今年度 文化勲章を受章された白川静さんが『常用字解』の中で書かれている言葉を大事に思う。…最初の文字制限が、一九四六年（昭和二十一年）「当用漢字表」という形で告示されたが、そこには何らの文化的考慮も含まれていなかった。一九八一年（昭和五十六年）「常用漢字表」が発表され、百字近く増え千九百四十五字にはなったが、一般的にはその範囲を出ることではないと思われる…と言及され、その結果はまことに明らかである。古典は軽視され、文化の伝統の上にも大きな障害があらわれてきている。…殊にわが国のように、歴史も古く、多くのすぐれた古典を持つ民族にとつて、その理解が失われ、受容の機会が狭められているということは、わが国の文化の継承の上からも、容易ならぬ事態といつべきであろう。

漢字は勿論、言葉は使うことで生き続けるものである。一度失くしてしまった言葉はなかなか生き返らず、言葉の世界を乏しいものにしてしまふ。培ってきた日本文化だけでなく、今、日常生活を豊かなものにするためにも、ゆとりの意味と心を、見据えていかなければならない責任を感じるのである。

加賀美 幸子（かがみ さちこ）

一九四〇年生まれ。元NHKエグゼクティブアナウンサー。現在はフリーとして、「NHKアーカイブス」、「ラジオ深夜便」、古典、俳句、短歌の番組を中心に多数の場で活躍中。おもな著書に、「読み聞かせる戦争」（光文社）、「こころを動かす言葉」（海電社）など。